

## 「ネコ缶」のギョウザ

浜田 道雄

息子が大学生だったときの話である。ラグビーをやっていた息子のチームに中国から来た留学生がいた。あるときその留学生が「日頃世話になってるから」とチーム・メイトを下宿に招いて、ギョウザを作って振舞ったという。

肉や魚のたっぷり入ったギョウザにすっかり満腹した息子たちが、空になった皿を見て彼の財布が心配になり、

「お前、こんなにたくさん作って、肉や魚にカネかかったらう？」と訊くと、彼はアツサリと、

「日本のスーパーは缶詰をすごく安く売ってるヨ。『ネコの顔』の付いたヤツ」という。

それを聞いて息子たちはみな絶句し、奈落の底に突き落とされたような気分になった。

「エ？ それって『ネコの缶詰』だろ？！」

だが、そこはバンカラなラガーのこと。すでに胃に収まってしまったことでもあり、すぐに「ネコのエサだって、料理しちやえばどうってこととはねえよな」と笑い飛ばしたという。

それから十数年後、私は南部タイのラノーン県を訪れた。アンダマン海に面した漁港で、海産物を使った水産加工業が盛んなところであり、ここで作られた魚の缶詰は日本にも多く輸出されている。そんなこともあって、魚の缶詰工場を見学したのである。

工場にはベルトが二本長く延びていて、流れ作業で缶詰を作っていた。一本は「ネコのエサ」の缶詰を作るベルトで、その隣のは「人さま」用のを作る作業ベルトだという。

作業のはじめのところでは従業員が缶に入れる魚肉の選別をしている。だが、私の見る限り二つのベルトの上の缶の材料には特段の違いがあるようにはみえない。どちらも同じ魚肉のようだ。

それを見て、息子が大学時代に食べたという「ネコ缶のギョウザ」を思い出した。いまこのベルトの上で動いている缶詰が、その「ネコ缶」だ。隣では「人さまの缶詰」が動いている。

二つのベルトの製品の違いはなんだろう？ 缶に貼られるラベルだけではないのか？ ならば、もし作業中にラベルを間違えたらどうなるだろうか？ すぐにそんな疑問が浮かんできた。

二つは同じような作業だから、間違いは気づかれずにそのまま最後の工程まで行ってしまうだろう。そのときは「ネコ缶」は「ヒト缶」として出荷される！

もしこんなことが実際に起きたらどうなるだろうか？ と改めて考えてみた。だが、多分なにも起きないだろうという気がする。

現代人は「ラベルが高級」なら「高級」と信じる人たちだ。「人さま用」の売り場で、「人さま用」のラベルの缶詰であれば、そのまま「間違ったネコ缶」を買って食べるだろうと思う。

そう考えると、息子たちのように「ネコ缶」でギョウザを作って食べてもおかしくはないじゃないか！ と思えてくる。

魚の缶詰を酒の肴にして楽しんでいるという友人がいるが、彼だって自分が「旨い」と思っているなら、それでいいじゃないか！